

## 藤野教授「床版の余寿命予測に見通し」

東大大学院前川教授の研究結果をたたえる

埼玉大学機構レジリエント社会研究センター(睦好宏史センター長)は28日、さいたま市の同大総合研究棟内で総会を開いた。同センター客員教授の藤野陽三横浜国立大上席特別教授が招待講演し、「道路床版の余寿命予測に見通しが立ってきた」と話した。

山口宏樹学長は「キャンパスに多様な学生、多様な学問が集まっており、多様性と融合の具現化を方針に掲げている。センターはその融合の場になってほしい」と激励した。

藤野教授は、阪神・淡路大震災や

新潟中越地震、東日本大震災、熊本地震、米・ミネソタの橋梁崩落事故などを挙げながら「どの地震や事故も、いままで気付かなかった部分に被害を受けている。みんながそれぞれの範ちゅうで、注意深く、危険がないか見る必要がある」と呼び掛けた＝写真。

自身がインフラの維持管理・更新・マネジメント技術の分野で参加する政府の「戦略的イノベーション創造プログラム」(S I P)での取り組みも紹介し、「インフラマネジメントの肝は検査ではなく、検査結果か

埼玉大レジリエント社会研究センター



ら建造物の寿命をどう判断するかだ」と指摘した。特に16年度は、東大大学院の前川宏一教授が開発した、道路床版のたわみ度合いから床版の残りの寿命が算出できる「余寿命予測システム」を「インフラ界のノーベル賞クラスの成果」とたたえ、「(適切な寿命判断に)見通しが立ってきた」と述べた。

センターの活動紹介では、インフラ強靱化部門を牧剛史准教授、防災・環境部門を田中規夫教授と齊藤正人教授、文理融合部門を小嶋文准教授が説明した。